

付属高校・新聞社との連携によるオンライン入学前教育の開発

—事後アンケート自由記述の分析—

中世古貴彦, 森誠子, 小田部貴子, 松原岳行 (九州産業大学)

九州産業大学では、旧推薦・AO 入試等の合格者を対象にした入学前教育に加えて、付属高校から推薦等により入学予定の生徒を対象に、新聞社と協力した入学前教育プログラムを対面主体で実施してきたが、2021 年入学者向け以降は 2 年連続で全面遠隔で実施した。SNS での交流等を導入した遠隔化 1 年目の効果検証の結果を踏まえた 2 年目 (2022 年入学者向け) は、高校・大学・新聞社との連携を一層強化し、生徒への指導を工夫した。事後アンケートの自由記述の計量分析から、プログラムへの習慣的な取り組みが入学後の学習への備えになると生徒が実感していること、取り組みを通して自己の弱点や課題を意識したこと、生徒間の交流が受講意欲の維持に効果的だったことなどが示された。

キーワード：入学前教育、遠隔、SNS、新聞、高大社連携

1 問題の所在：遠隔入学前教育の開発

大学入学予定者を対象とした入学前教育は広く見られるものになったが、主として学力選抜を経ていないものを対象としていることもあり、その実施には次のようないくつかの困難が付きまとう。そもそも、入学前教育を実施する理由・目的は、入学予定者の学習習慣等が不十分であることに対処するためであるが、最も介入を行いたくない学習習慣が確立していないものほどそもそも受講しないか、仮に受講しても熱心に取り組んでくれないという、皮肉な事態に陥りやすい¹⁾。受講の意欲を維持するために指導や刺激を与えたくても、先行事例で度々指摘されるように、大学のキャンパスで集合授業や合宿などを行うことは「遠方に居住するものには時間的・経済的な負担も大きい」

(大塚ほか, 2019: 29) し、高校の行事日程や引率の負担なども考慮すると回数を極力抑制せざるを得ない。加えて、いわゆる「コロナ禍」以降は、社会情勢的に対面実施を見合わせざるを得ない状況も続いた。そうになると、通信添削や e ラーニングのような、個人の自主性に委ねる割合の大きい遠隔の手段が多用されやすい。だが、急速に遠隔化が進んだ大学入学後の教育でも、「対面でさえ十分ではない学習意欲が、教師やほかの学生がリアルに介在しない個人のオンライン環境で永続的に充実して示されていることはあまり考えられない」(溝上, 2021: 10) ことが危惧されており、当然ながら入学前教育でも同じことが心配される。

新型コロナウイルス感染症対策のためと称した様々な措置はいずれ必要なくなるかもしれないが、コロナ禍の中で大学や高校の教育現場で生じた数々の変化のいくつかは、「ハイブリッドな学びと大学教育のイノ

ベーション」(溝上, 2021) となって定着すると考えられる。入学前教育に関して言えば、例えば、オンラインツールを用いることで、対面実施に伴う時間的・経済的、あるいは物理的制約が緩和されるため、コロナ禍終息後にも遠隔要素が残るか、一層活用されるようになる蓋然性が高い。効果的な遠隔入学前教育の開発は、多くの大学に共通する課題と考えられ、事例研究の蓄積には少なからぬ意義があると考えられる。

2 先行研究：交流を重視した遠隔入学前教育

先述の「教師やほかの学生がリアルに介在しない個人のオンライン環境」(溝上, 2021: 10) は、入学前教育でも遠隔環境下の学習意欲を阻害すると考えられる。そこで、受講者同士や実施側とのヴァーチャルな交流を積極的に組み込んでいると考えられる入学前教育の事例について検討する。

単に e ラーニング課題を与えるのみならず、受講者間や教員との双方向的なコミュニケーションを狙って SNS や Learning Management System (学習管理システム、以下では LMS) を活用している入学前教育の事例として、長崎大学 (木村ほか, 2012) や高知大学 (大塚ほか, 2019) の事例が挙げられる。ただし、前者の事例が中心に据えるのは対面合宿と考えられ、先輩学生も参加する専用 SNS の位置付けは補助的といえる。また、後者の事例は、対象が医学部医学科入学予定者とやや特殊で、LMS の双方向的活用も入学前教育の特定課題においてのみ moodle 上で受講者と教員がディスカッションを行うというもので、長期にわたり日常的にオンラインで交流するものではない。

コロナ禍における様々な制約の中でも、一定期間の

入学前教育を遠隔主体で実施した事例の一つとして、桐蔭横浜大学（溝口ほか、2021）が挙げられる。オンライン会議システム（Zoom）を用いて反転授業的な双方向型講座を隔週で受講するという大変作り込まれた取り組みだが、任意参加と見受けられ、残念ながら後半になるにつれて取り組み状況が悪化し、脱落者も一定数いたとされる（溝口ほか、2021: 121-122）。

SNS を中心に据えて全面遠隔で実施した事例として、九州産業大学（中世古・小田部ほか、2021；中世古ほか、2022）が挙げられる。付属校推薦などによる入学予定者を対象に、1 か月強の新聞購読と 3 回の遠隔授業等を課し、学習習慣、読解力、文章力などを身に着けさせることを目的としたプログラムだが、特徴はコロナ禍で遠隔化した際にビジネスチャットアプリである Slack を導入し、オンラインでの交流を毎朝課した点である。入学予定の生徒らに新聞記事を読み競わせ、お互いの要約や考察に対して高校教員、新聞社講師陣、大学教職員、先輩学生と一緒にコメントの掛け合いを行わせたところ、大半の生徒が新聞をほぼ毎日読むようになり（前年までそうした生徒はごく一部だった）、プログラムの満足度なども対面で実施していた前年より向上していた（中世古ほか、2022）。しかも、Slack 上での投稿や意見交換の活発さは、元々の学習習慣や入学時の基礎学力（国語プレイスメントテストの得点）を統制してもなお、入学後の学業成績と有意な正の相関を有することが、追跡調査に基づき報告されている（中世古・小田部ほか、2021）。

九州産業大学の例は、遠隔入学前教育では SNS 等を使って一定期間日常的にオンライン上での学習に取り組みさせる仕掛けを構築することが、受講の意欲を長期間維持させ、遠隔授業も含めた入学後の学習への備えにもなる可能性を示唆している。だが、入学後の成績と相関があるとはいえ、それだけでは遠隔での活動に元々親和的だったものが、遠隔入学前教育も入学後の遠隔授業も卒なくこなしたに過ぎないとも解釈できる。取り組み時間の大半を SNS 感覚での交流に充てるような入学前教育が受講者にどのような変容をもたらしたのかは、十分に検討されてはいない。

3 本稿の課題：交流重視の遠隔入学前教育の効果

以上を踏まえ、本稿では、受講者間や実施側との交流を重視した遠隔入学前教育が、受講者をどのように変容させるのかを質的な側面から可視化するという課題を設定する。具体的な分析対象として、本稿の問題意識に鑑みて適切な例と考えられる、九州産業大学における付属校推薦合格者等を対象とした入学前教育プ

ログラムを取り上げる。

以下では、まず、4.1 で、同プログラムの概要と入学後の学習との対応がどのように設計され、プログラムへの取り組みによりいかなる変容が期待されているのかを整理する。次に、4.2 では、受講者への事後アンケート²⁾における自由記述を計量分析することで、受講者が自身の変容をどのように認識していたのかを明らかにする。4.3 では、実施関係者アンケート³⁾の結果を抜粋し、実施側から見て期待されたような変容が見受けられたのかを確認する。5. では、以上の分析による知見と、残された課題を整理する。

4 九州産業大学の付属校向け入学前教育

4.1 プログラムの概要と狙い

九州産業大学の付属高校向け入学前教育は、先述の通り学習習慣等を身に着けさせることを目的として、読売新聞西部本社「新聞のちから」委員会の協力で実施されてきた。2 つの付属高校で取り扱いが若干異なるが、2022 年については両校の学校推薦型選抜（付属校）の合格者全員に加え、一方の高校の総合型選抜の合格者全員、合計 152 人が受講した⁴⁾。実施期間（基本教材となる新聞が配達された期間）は、1 月 16 日（日）から 2 月 23 日（水）までの 6 週間弱だった。

プログラムの内容は、主として Slack の当該プログラム用ワークスペースでの活動と、Zoom による遠隔授業、朝の会（と個別指導）から構成された。Slack 上では、平日はほぼ毎朝、当日の朝刊に掲載された任意の記事を選び、その「要約」と「意見・考察」を、午前 9 時までに当該日用に設けられた Slack のチャンネル内に「投稿」することが生徒らに課された。その後約 1 時間は、リアクションボタン（いわゆる「いいね！」マーク等）や「返信」機能を使い、お互いの投稿について意見交換を課した。これは、対面におけるグループディスカッションを置き換えた活動だが、手本もないのに生徒だけで活発な意見交換ができるとは想定しにくかった。そこで、基礎教育センターの学生アシスタント 16 名を活用し、先輩として手本を示すべく意見交換に参加してもらった。なお、学生アシスタントには、事前に Slack の操作や議論を促す方法などについての研修を受けさせたうえで、シフトを組み交代で参加させた。また、高校の先生方にも、生徒らの参加状況を適時共有しつつ、気になる生徒への声掛けや、頑張っている生徒への激励などを行ってもらった。さらに、新聞社講師陣にも、記事を正確に読み込ませるコメントにより意見交換を促して

もらった。もちろん、同プログラムを担当する大学教職員 4 人も、ほぼ毎日複数人が意見交換に参加した。

実際の Slack 上での意見交換の例を一部紹介する。2月17日付け34面の記事「[サイバーテロ 病院の危機] (1) 「金になる」迷わず攻撃」は、身代金を目的としたハッカー集団のサイバー攻撃を受けた町立病院の被害等を報じた内容だった。この記事に関し、生徒 A は 300 字強の要約と共に、「人を脅して儲かるなんて言う狡いことが、ビジネスとして行われていることに憤りを感じた。どうしてこんなことができるのかわからない。[中略] ウイルスを開発できるプログラマーなんて頭がいいはずなのに、それをもっと別の、人の役に立つ場所でその能力を生かすことはできなかったのか。[中略] システムのさらなる強化やホワイトハッカーの活躍に頼るしかないのか。いろいろ想像してみたがいまいち解決策はわからなかった」等の 450 字程度の意見・考察を投稿した。これに対し、生徒 B が「もしかしたらゲーム感覚なのではないのかな? と思ってしまいました。[中略] 現実にはたくさんの方が不幸になることを少しは理解して、罪の意識を持って欲しいと思いました」等と 100 字程度で返信し、生徒 C も「すごい事件ですね。[中略] デジタル化が進む世の中でこういったコンピューターを使った事件も増え、対策もするのでしょうか、さらにその対策も越えてくるものを作られたり…まるでいちごっこのようになりそうですね…」と 150 字程度で返信した。生徒 A も「コメントありがとうございます。[中略] 知らない、わからない、ではなく少しでも理解してほしいものです。」「まさにその言葉通り、キリがないですすよね。どこかでどうにかけりをつけられるといいのですが…」等と応じた。そこで、新聞社講師陣が、第 2 回遠隔授業で説明された「新聞は継続性のメディア」であることの一例として、この記事は前日の 1 面の「病院 1 割 脆弱性未対策 対サイバー攻撃 全国調査」の記事の続きであることを指摘した。すると、生徒 A が「昨日の記事を見返してみました。[中略、追加の情報で] ふさがっていた視野が少し広がったような気がします。電子カルテの方がアナログより管理しやすく効率はよさそうですが、各病院がリスクを理解してシステムを利用することが大切なんですね」と、最初の投稿にはなかった視点からも意見を述べるようになっていた。

同ワークスペース上では、プログラム終了までに 19,000 件以上の投稿メッセージ（実施側からの全体連絡や個人間のダイレクトメッセージ等も含む総数）があった。生徒が要約と意見・考察の投稿とは別に返

信した回数は、確認できた範囲では平均 2.0（標準偏差 1.4）で、返信回数 0 のものは 5.3% だった⁵⁾。

以上の毎朝の活動に加え、新聞社講師陣による文章指導のワークショップなどの遠隔授業を、Zoom を用いて実施した。隔週で毎回 2 時間を 3 回実施したところ、88% の生徒が 3 回とも参加し、1 回も出席しなかったものは皆無だった。

さらに、2022 年からの新しい取り組みとして、「Zoom 朝の会」を、週 1 回、合計 6 回実施した。毎週火曜日を中心に、Slack での活動が終わった朝 10 時から 30 分程度、大学教職員が、オンラインでの意見交換のコツや、プログラムにおける課題やその取り組みと大学での学び方の関連などについて説明した。平均参加回数は 5.4 回で、全員が最低でも 3 回以上出席した。

さらに、プログラムへの取り組み方が低調な者を事前にチェックし、Zoom 朝の会終了後に退室させず、うまく取り組めない各自の理由を聴取し、個々の状況や悩みに応じたアドバイスを行った。こうした個別指導を、2022 年からの新しい取り組みとして、中盤から終盤にかけて 3 回、各回 7 人程度、延べ 20 人に行った⁶⁾。

また、プログラム終盤では、新聞の読者投稿欄「気流」への掲載を目指して、文章を所定の用紙に手書きし、写真に撮って期限内に Slack 上で提出することも課された。

これらの課題は、次のように入学後の学習と対応することが想定されていた。まず、毎朝新聞を読んだうえで Slack での活動に参加することは、朝型の生活を送りながら予習をしたうえで授業に参加するという行動に通じる。また、本格的なビジネス仕様の SNS に日々ログインして課題をこなすことは、入学後に各種 LMS を用いて自律的に学習を進める予行演習になる。Zoom による授業や朝の会を、カメラオン（顔出し）でチャット機能や各種リアクション機能を何度も使わせる双方向的な内容にしていることは、入学後の遠隔授業のスムーズな受講につながる。なお、スマートフォン依存の生徒らが、タイピングなどの PC 操作に親しむことも重要であるので、プログラムの受講には PC を用いるように繰り返し指導していた。また、オンラインではあるが他の学生や教職員と意見交換を繰り返すことで、入学後の授業でもただその場にいればよいのではなく、予習の内容や他の学生や教員の発言を踏まえた応答を積極的に行うような受講態度が望まれることを体感できる。些末なことでは、敢えて写真による提出課題を設けることも、添付ファイルが画

た。[他の付属：引用者] 高校の方と意見交流することで、友達ができるか不安でしたが、連絡先を交換して話すようになり、対面した時が楽しみになりました。パソコンの扱い方も慣れてきて、これからの遠隔授業にも役立つと感じています。」

「人に自分の考えを説明する難しさや、自分の意見を言うだけでなく全く話したことがない人たちの意見への返信をする等とても難しい課題が多かったですが、苦手なことも習慣づけていくとコツや楽しさがわかってきてとても自分の身になったと感じました」

「最初は新聞を読むことや自分の意見を言うことが難しかったですが、回数を重ねるごとにそれらを楽しめるようになることが出来、意見を言い合う練習になりました。このような経験をすることが出来たことに感謝し、今後の生活に活かしていきたいと思います。」

では、最初は苦痛だった学習活動を、変容が生まれるほど長期間にわたり、しかも早朝に継続させるカギは何だったのか。生徒らの記述からは、仲間同士の学び合いの効果が大きいことが読み取れた。

「同じ歳でも驚くほど大人びた意見を持った人がいて、負けてられないなと自分の意見に対しなぜそう思ったのか深く考察するようになりました。結局、追いつけたとは思っていませんでしたが、ニュースへの考え方や文章の書き方に刺激を受けることができました。」

「最初は仲がいい人の投稿に目が行ったり、返信をしていたけれど、段々と自分とは違う意見の人や、面白い表現をする人に目が行くようになりました。実際に会ってみたいと思うような人もいて、オンラインで正直残念ではあったけれど、オンラインだからこそその面白みもあったなと思います。自分より優れたものを見て、積極的に取り入れたり自分のものにできなかったことがまだまだあると感じたので、もっと自分の成長に繋げていけるように取り組みたいです。」

「同じ記事でも違うことを書いていた人との意見交換が1番有効だと思った。」

4.3 実施側関係者から見た変容

こうした状況は、プログラム実施側の目にはどう映っていたのか。実施側関係者アンケートの自由記述回

答からは、朝の会での指導や生徒同士の意見交換などを介した大学での学習に対する意識付け、LMSに見立てたオンラインツールへの適応、大学生なら身に着けておいてほしい常識に対する意識付け等を行わせることができたのではないかという記述が散見された。

「WEB で実施する定期的な朝の会は良かったと思います。[中略：引用者] 生徒がこちらの期待以上に Slack を使いこなしていることに驚きました。」(高校教員)

「大学入学への意識付けには良かったと思います。他大学に比べてかなり熱心に指導してもらって良いと思います。」(高校教員)

「[朝の会で大学教職員が丁寧に指導することで：引用者] 3回の授業内では伝えきれない事を伝えることができたし、高校生にとっても、大学をより身近に感じる事ができたと思う。」(大学教職員)

「生徒同士が意見交換をすることで記事に対する知識がより深まったこと、またその記事に対して意見・考察を行う事で、大学に入った際もレポート課題に対する取り組み方が他学生と比べ、いい方向へと大きく変わってくるなと思いました。」(学生アシスタント)

「18 歳成人化、情報リテラシー、コンプライアンスなど身近な最新の問題を取り上げたことで、それらへの意識も高まったのではないのでしょうか。」(新聞社講師)

なお、こうした語りの背景には、高校、大学、新聞社の連携があったことが指摘できる。プログラムの設計・内容の調整、遠隔授業の予行演習、気がかりな生徒への対応の相談等のために、メールや電話だけでなく、実施関係者専用の Slack のワークスペースを別途設け、プログラム開始の少し前から終了まで、毎日のように関係者間でやり取りを行った。正確な把握はできないが、2022 年分の実施に当たり 1,000 件ほどの投稿メッセージがあったものと推定された。

5 結論：交流を梃子にした意識の変容

九州産業大学の遠隔入学前教育が、長期間の日常的なオンライン交流を組み込むことで、どのように受講者を変容させるのかを整理したい。生徒の自由記述の分析結果からは、細かなポイントまで漏れなく反映されてはいないものの、実施側が意図したような効果を生徒も自覚していることが確認できた。大学入学後の

学習と対応付けられた課題に取り組む中で、遠隔授業への対応力や、より積極的な授業参加につながる意識やスキルが身に着いたという記述が多数見られた。当初は難しく感じられた学習行動も、習慣的に取り組む中で苦手意識が薄れていったが、そうなるほどに生徒を没頭させるには仲間同士で学び合う場を演出することが効果的だった。また、実施側関係者の目にも、概ね企図したような変容が捉えられていた。

ただし、課題も指摘できる。今回の分析では、SNS 感覚の交流にさそってこない生徒への対応がどうあるべきかまでは見えてこない。また、プログラムの正味の効果を確認するには、入学後の成績などを用いた追跡調査も欠かせない。さらに、生徒同士の交流を下支えしたのは、参加状況の把握、個別指導、意見交換への参加などの実施関係者の献身と熱意と考えられる。受講者が顔見知りの多い付属高校の生徒同士であり、既に生徒と関係が構築されていた高校教員からの指導・助言があったことが取り組み方に影響していたとも考えられ、もしも他の入試区分にまで同様のプログラムを拡大するならば、更なる工夫が必要であろう。実施側の負担軽減と双方向的交流を両立させる効率的な運営・指導方法の開発（例えば、元受講生に今度は実施側として後輩を指導してもらい、活動状況を踏まえた個別指導を強化する）など、今後の継続や発展のために更なる工夫が求められよう。

注

- 1) 例えば、中世古・森ほか（2021）は、入学前教育の教材として自宅に配られる新聞を使って毎日欠かさず自宅学習を行うように指示したにもかかわらず、大多数の受講者は週に2～3日しか教材に目を通していなかったこと、しかも入学前教育のための学習時間は元々の学習習慣（高校3年次1学期の学習時間）と強い正の相関があったことを報告している。
- 2) 事後アンケートは、実質的なプログラム最終日（2022年2月22日）の第6回Zoom朝の会中に、Microsoft Forms上で実施した。2月末までに回答のあった139/152人（回収率91.4%）を対象に集計した。なお、本調査の実施に際しては、学内の研究倫理審査を受信し、実施許可を得た（「効果的な高大接続に向けたハイブリッド型入学前プログラムの開発」、通知番号2021-0019号）。
- 3) 2022年2月22日～3月2日に、Microsoft Forms上で実施した。読売新聞社講師陣3人、高校教員5人、九産大教職員4人、学生アシスタント8人の計20人が回答した。
- 4) 同プログラムの受講者数は、近年では入学者（例年約2,500人）の6%前後で推移している。受講率は例年100%である。
- 5) これら無返信の者も、大半は自分がその日読んだ記事の要

約と意見・考察は投稿しており、完全に受講を放棄した脱落者ではない。また、取り組み状況の記録は主に学生アシスタントが担ったが、返信回数には確認の作業負担が大きいため、およそ均等に全期間をカバーする7日のみ集計対象とした。そのため、全く返信を行わなかった生徒は、実際は更に少ない可能性がある。なお、返信回数は、必須であるという意識の醸成やコツをつかむのに時間がかかったのか、後半になると多くなっていた。

- 6) 前年の反省を踏まえたこれらの新しい取り組みの効果検証も重要だが、紙幅の都合もあり、稿を改めて論じたい。
- 7) 「全く役に立たない」=1から「とても役に立つ」=6の6段階で尋ねたところ、平均値4.8、標準偏差1.0だった。

謝辞

プログラムの実施にご協力いただいた、九州高校ならびに九州産業高校の先生方、読売新聞西部本社「新聞のちから」委員会の皆様、基礎教育センターの学生アシスタントの皆様、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 木村拓也・池田光彦・西原俊明・大橋絵理・田山淳・竹内一真・井ノ上憲司・山口恭弘（2012）。「長崎大学における入学前教育の枠組みと効果測定—学生チューターを交えたヴィジョン形成教育の組織化と基礎学力向上の取組—」『大学入試研究ジャーナル』22, 95-104.
- 溝上慎一（2021）。「ハイブリッドな学びと大学教育のイノベーション」『IDE：現代の高等教育』635, 10-14.
- 溝口侑・清水栄子・原田章・田上正範・松井晋作・森朋子（2021）。「入学前教育プログラムの可能性」『大学教育学会誌』43(2), 119-123.
- 中世古貴彦・森誠子・小田部貴子・一ノ瀬大一・秋山優（2021）。「新聞を活用した付属高校推薦入学者向け入学前教育：受講者アンケートの分析結果」『九州産業大学基礎教育センター研究紀要』11, 53-62.
- 中世古貴彦・小田部貴子・森誠子・松原岳行（2021）。「新聞を用いた入学前教育の遠隔アクティブラーニング化：追跡調査の結果」『大学教育学会2021年度課題研究集会要旨集』, 95-98.
- 中世古貴彦・森誠子・小田部貴子・松原岳行（2022）。「Slackを活用した高大接続の試み—新聞を用いた入学前教育の遠隔アクティブラーニング化—」、『九州産業大学総合情報基盤センター COMMON』41, 74-88.
- 大塚智子・関安孝・喜村仁詞・武内世（2019）。「インターネットを介した入学前教育『高知大学入学前moodle』—学習意欲維持への試み—」『大学入試研究ジャーナル』29, 29-35.